

説 林

支那に於ける稻作

特にその品種の發達に就いて

加 藤 繁

支那人が稻を栽培したのは非常に遠い昔からのことで、支那最古の文獻の一つである詩經にも稻の名が見えて居る。されば少くとも今を距ること二千七八百年以前から稻を栽培して居たのである。但し古代支那國家の中心であつた黃河流域は水利に乏しくして水田に適せず、間々水田を造ることが出来る。その面積は幾ばくもなかつた。従つて稻は淮河の南から揚子江沿岸に亘る地方に於いて主として栽培されたので、これは周禮職方氏の記述に依つても窺ひ知られる。支那に於ける稻の本場は、今日も古代も大體同様であつたと謂つてよ

う。

稻はいふまでもなく本來熱帯の産物であるから、支那に於いても南部から次第に北方に擴がつたに相違なからう。さうして支那の南部にはもと支那民族ならざる原住民が居住して居つたことゝ考へられるから、最初に支那南部で稻を作つたものは、恐らくこの原住民であつたのであらう。支那民族は北より段々と南に進み、淮河から揚子江に亘る一帯の地に植民し、原住民から稻を作ることゝ學んで、これを大に發達せしめたのであらう。従つて淮河揚子江一帯の稻作は、支那民族の南方發展と共に大に發達したことゝ思はれる。

かくて稻は淮河以南、今の廣東地方に至る廣大な地域に於いて作られ、又た四川に於いても作られ、さうして此等の地方に於いて人口が孳殖し、農業が發達すると共に水田の面積も増加し、米の産額も増加したのであるが、劃期的に米の産額が増大したのは唐代であつたやうである。(1)も主要な産地は浙西即ち今の江蘇省の長江以南及び浙江省の錢塘江以北の地で、言換へれば蘇州常州湖州松江嘉興等の地方であつた。宋代に於いても此の地方は米産地の巨擘であつ

たが、此の外、江西湖南地方に於ける増産に著しきものがあつた。明から清にかけては湖南の産米が益増加し、浙西をも凌がんばかりであつた。唐宋の際には「蘇常熟天下足⁽²⁾」とか「蘇湖熟天下足⁽³⁾」とかいふ諺があつたが、明代になると、「湖廣熟天下足⁽⁸⁾」といふのも現れた。これに依つても、近代に至つて湖南の米作が大に發達したことが知られる。これ等のことは他日詳論する心組であるから、ここには大要だけを掲げて置く。

さて稻には、古來如何なる種類があつたか。後漢時代の字書「説文」にいねを意味する言葉として

稻 稔 稔 稔 稔 稔

等を掲げて居る。この中、

稻はいねの總稱であり、稔は稻の同意語である。

稔はいねの黏せざるもので、うるちである。

稔はいねの黏するもので、もち米である。後世では糯の字を用ひる。

稔は稻の俗字であるが、後世では主としてこれを使用す

る。

稔はいねの最も黏せざるもので、これに比すれば、稔も稍黏するものといふことが出来る。

右は段玉裁等清朝學者の説に依つて解釋したので、説文の本文には解説が缺けて居る。清朝の學者は此等の文字の古典に現れた用ひ方よりしてその性質を推定したので、大體正確と見てよい。尙ほ説文には見えないけれども、江南で稔を稔と云つたことは揚子方言に依つて知られる。さうして後世では稔が稔の意味に用ひられ、稔の字は廢れた。南宋の羅願の「爾雅翼」には、稻の黏せざるものを稔とし、黏するものを糯とし、稔に比して小にして最も黏せざるものを稔とし、尙ほ稔を早稻とし、稔を晚稻として居る。宋代には、後に述べるやうに占城の早稻が輸入栽培されたのであるが、爾雅翼には、これを在來種と區別して特に説明して居る。

降つて明清時代になると、糯の意味には變るところが無かつたが、稔及び稔の意味は稍變動した。右に述べたやうに、宋代では占城稻と稔とは區別されたが、明以後には、或る地方

では占城稻をも秬の一種と見なして、秬といふ語の中に包含せしめた。又た或る地方ではやはり秬と占城稻とを同一に見なし、さうしてこれを占と稱へ、粘又は黏とも書した。又た或る地方では、秬と秬とを一括して、うるちを總べて黏と云つた。清末には秬を尖とも書いた。

かやうに言葉の使ひ方は、近代に至つて複雑になつて居るが、その背後の事實として、稻に黏せざるもの即ち稷と、黏するもの糯と、最も黏せざる秬との三大別が存したことは、今も古も變り無いと謂つてよからう。

以上述べたところは稻の極めて大きい區別であつて、その中で小さい區別即ち品種が次第に成立したのである。稻の品種は、ごく古い時代に就いては傳へられて居ない。それを窺ひ知ることが出来るのは晉以後である。晉代に於ける稻の品種は晉の郭義恭の廣志に見える。廣志は全體としては既に滅び、齊民要術・初學記・太平御覽等に引用された一部分が傳はつて居るが、幸にもその部分に稻の品種が掲げられて居る。又た齊民要術にも當時即ち後魏時代の品種が傳へられて

居る。降つて宋代特に南宋の品種は當時の地方志、淳祐玉峯志・寶祐琴川志・淳熙三山志等に見えて居る。明代の品種はさまざまの書に見えるが、黃省曾の理生玉鏡に掲げられたのが最も詳である。清朝は姑く措き、明以前の各時代では晉・後魏・南宋・明の品種が比較的詳に傳へられて居るから、これを検討してその發達の大勢を窺ひたいと思ふ。さうして説明の便宜の爲め、先づ明代のそれを述べ、溯つて宋以前に及ぶことゝしよう。

理生玉鏡に掲げられた稻の品種は左の如くである。

箭子稻	紅蓮稻
金城稻	勝紅蓮
穠穠稻	雪裏棟
師姑秬	早白稻
晚白稻(一名蘆花白)	麥爭場
烏口稻	再熟稻
中秋稻(一名閃西風)	紫芒稻
下馬看(一名三朝齊)	香秬

香子(一名香粳) 三種千

以上稈十八種

金釵糯 羊脂糯

臘脂糯 虎皮糯

趕陳糯 矮糯

青稗糯 蘆黃糯

秋風糯 小娘糯

烏香糯 鐵梗糯

馬鬃糯

以上糯十三種

合計三十一種

右の外、宋代占城から輸入されたところの占城稻に屬する品種が數種掲げられて居るが、これは外來種であるから姑く除外し、後に改めて述べることとする。

理生玉鏡は蘇州の人黃省曾の編纂したもので、王鏊の姑蘇志の土産の部の記事を本として、更に増補を施したものである。従つて此の書に擧げられた稻の品種は蘇州地方に行はれ

たものであつたであらうが、この地方は支那に於ける稻の本場であつて、古來優良の米を多量に産した處である。さればその稻の品種は當時の支那の稻品種の代表的なものであつたと見て誤りないであらう。

翻つて南宋の地方志に載せられた稻の品種を観ると、理生玉鏡に擧げたのと同じ名稱のものが少からず存するのである。即ち

箭子稻は 寶祐⁽¹⁰⁾琴川志に見え、

紅蓮稻は 淳祐⁽¹¹⁾玉峯志に見え、

金城稻は 玉峯志琴川志及び淳熙⁽¹²⁾三山志に見え、

穉稻は 琴川志玉峯志及び紹定⁽¹³⁾澈水志に見え、

雪裏揀は 琴川志玉峯志に見え、

師姑杭

早白稻

晚白稻

麥爭場は 俱に琴川志に見え、

烏口稻は 琴川志玉峯志に見え、

再熟稻は 玉峯志に見え、

閃西風は 玉峯志琴川志に見え、

下馬看は 玉峯志に見え、

香稻(玉鏡の香稻と同一であらう)も 玉峯志に見え、

香 粳

金釵糯は 琴川志に見え、

臘脂糯は 淳熙三山志に見え、

趕陳糯は 玉峯志琴川志に見え、

矮 糯

青稈糯

秋風糯は 琴川志に見え、

閩女糯(玉鏡の小娘糯⁽¹⁴⁾と同一であらう)は 玉峯志に見え、

鐵梗糯は 琴川志に見えて居る。

即ち理生玉鏡に掲げられた稈米糯米三十一種の名稱の中、約

二十三是南宋の地方志に見出されるのである。

次に此等品種名に與へられた屬性の説明に就いて、明と宋

との文献を對照して見よう。

品種	明の文献	宋の文献
箭子稻	(玉鏡)其粒細長而白。味甘而香。是謂稻之上品。	(琴川志)此品最高。
紅蓮稻	(玉鏡)其粒大而芒紅。皮赤。	(玉峯志)米半有紅粒。確時紅粒先白。其味甚香。 (琴川志)粒白無芒。
穉稻	(玉鏡)其粒長而色斑。 ⁽¹⁵⁾ (始蘇志)色斑。粒微長。	(琴川志)稈軟有芒。粒尤大。
雪裏揀	(玉鏡)其粒大色白。稈軟有芒。	(琴川志)無芒。
師姑稅	(玉鏡)其粒白。無芒而稈矮。	
麥爭場	宋明の文献とも粒米其他のことを掲げて居ないが、成熟期は下に述べるやうに同一である。屬性も恐らく同様であつたらう。	
烏口稻	(玉鏡)色黑而耐水與寒。是爲稻之下品。	(琴川志)米之最下者。
再熟稻	(玉鏡)其曰刈而根復發苗實。謂之再熟稻。	(玉峯志)田家遇豐成。苗根復蒸發。旋復成實。

閃西風	(玉鏡)其粒白而大。	(琴川志)名稱を掲げただけで屬性の説明を缺いて居る。しかし粒の白かつたことはその名稱よりして推定せられる。
香 秈	(玉鏡)粒小而性柔。 (宋の香秈)	(玉峯志)香於紅蓮。
香 糯	(玉鏡)其粒小色斑。以三五十粒入它米數升炊之。芬芳馨美者。	(琴川志)米粒甚香。著數合。餘飯皆香。
金釵糯	(玉鏡)其粒長。	(琴川志)皮糠黃。有芒。粒圓。
矮 糯	(玉鏡)其粒大而色白。	(琴川志)屬性の説明を缺く。但し宋の矮糯も明のそれも稈が矮小であつたことはその名稱によつて察せられる。
青稈糯	(玉鏡)其稈黃而芒赤。已熟而稈微青。	(琴川志)屬性の説明を缺く。但し明の青稈糯と同様、已に熟して稈が微青であつたことは、その名稱に依つて察せられる。

秋風糯	(玉鏡)其粒圓白而稈黃。 (中略)可以代硬而輸租。 又謂隔官糯。	(琴川志)稈勁。無芒。
鐵梗糯	(玉鏡)其稈硬而不仆者。 謂之鐵梗糯。	

明の文獻に記すところは稍詳かであり、宋のそれは簡單であり、且つ種種稻の如く矛盾する場合もあるが、大體一致するものと見て妨げあるまい。

尙ほ成熟期に關する記述を對照すれば次の如くである。

品種	明の文獻	宋の文獻
箭子稻	(玉鏡)九月而熟。 (姑蘇志)晚熟。	(琴川志)晚熟。
紅蓮稻	(玉鏡)五月而種。九月而熟。	(琴川志)有早晚二種。
糯稻	(玉鏡)五月而種。九月而熟。	(琴川志)熟最早。

師姑糯	(玉鏡)五月而種。九月而 熟。	(琴川志)晚熟。
麥爭場	(玉鏡)三月而種。六月而 熟。	(琴川志)六月熟。
烏口稻	(玉鏡)其再時而晚熟者。 謂之烏口稻。	(琴川志)再時晚熟。
閃西風	(玉鏡)四月而種。八月而 熟。	(琴川志)八月熟。
矮糯	(玉鏡)四月而種。九月而 熟。	(琴川志)晚熟。
青稗糯	(玉鏡)四月而種。九月而 熟。	(琴川志)晚熟。
秋風糯	(玉鏡)大暑可刈。	(琴川志)早熟。

此の場合にも、籾程稻を除き、他は殆ど全く一致すると謂つてよいやうである。かやうに、宋明の文獻に見える稻の品種の中、その記述の存するものについて、屬性及び成熟期を比較して見ると、大體一致するのである。願ふに、記述の存しない他の品種の屬性及び成熟期も恐らく同様であつたら

支那に於ける稻作特とその品種の發達に就いて 加藤

う。されば理生玉鏡に見え又た南宋の地方志に見える二十餘種の稻品種は單に品種を同じうするばかりでなく、粒・芒・稈等の様々の性質及び播種收穫の時期をも一つにしたので、畢竟同一の物であつたとしなければならぬ。さうしてそれは、此等の品種が明代に成立したものでなく、南宋時代に既に存在したことを示すものに外ならないのである。

支那近代に於いては、稻の六七月に熟するものを早稻とし、八月に熟するものを中稻とし、九月及び十月に熟するものを晚稻として居る。この標準に依つて南宋以來の諸品種を分類すると次のやうになる。

- 早稻 麥爭場 秋風糯
- 趕陳糯 香 秬
- 香 糯
- 中稻 早白稻 閃西風
- 小娘糯
- 晚稻 箭子稻 紅蓮稻
- 籾程稻 師姑稻

晚白稻 羊脂稻

臙脂稻 矮糯

青稈糯

次に宋明の文獻に依つて、稻の諸品種の屬性を六七の觀點から類別すると、あらまし左の如くである。

- 一、粒の大きいもの、小さいもの。紅蓮稻・雪裏揀・閃西風・矮糯等は粒が大きく、香秬・香粳等は小さい。
- 二、粒の長いもの、圓いもの、尖つたもの。箭子稻・糯稻・金釵糯・趕陳糯等は粒長く、秋風糯は圓く、金城稻は尖つて居る。
- 三、粒の色の白いもの、赤いもの、斑なもの、黒いもの。箭子稻・雪裏揀・師姑秬・閃西風等は白く、紅蓮糯は赤く、糯稻・香粳は斑に、烏口稻は黒い。
- 四、粒の香の高いもの、さうでないもの。香の高いものは箭子稻・香秬・香粳等。

五、味の甘いもの、さうでないもの。味甘きものとして箭子稻が最も著れて居る。最も甘くないのは烏口稻

あたりであつたらう。

六、芒のあるもの、芒の無いもの。芒の色の紅なるもの、白いものなど。稻は芒のあるのが普通であるが、師姑秬・鐵梗糯等には芒がない。又た紅蓮稻・青稈糯の芒は紅で、秋風糯の芒は白い。

七、稈にも特に勁いもの、比較的弱いもの、長いもの、短いものなどの區別があつたやうである。特に勁いものは鐵梗糯で、短いものは矮糯であつたらう。

右は宋の文獻に記されたところよりも明のそれに依ることが多いのであるが、しかしかやうな變化は大體は南宋以來存したものとて大過無いであらう。

さて右に擧げたやうな南宋の諸品種はいつ頃成立したのであらうか。北宋時代はどうか、唐代はどうか、更に溯つて魏晉南北朝はどうか。北宋の元豐中に編纂された朱長文の吳郡圖經續記には、

稻有早晚。其名品甚繁。農民隨其力之所及。擇其土之所宜。以次種焉。惟號箭子者爲最。歲貢京師。

とあつて、箭子の名が掲げられて居る。やはり北宋の人、張方平の詩には、

鵝脂酒清醇。

とある。鵝脂は羊脂と同じ音を現はしたもので、羊脂縑を指すのであらう。張白玉の詩には、

穠穠西成稻。逍遙北海尊。

とあり、蘇東坡の詩にも、

翠浪舞翻紅穠穠。白雲穿破碧玲瓏。

とあり、張來の詩にも、

裹飯送君吾豈敢。黃雲穠穠連東臯。

とあつて、穠穠稻のことを詠みこんで居る。唐の杜牧の詩に

は、

罷亞百頃稻。西風吹半黃。

とあり、韋莊の詩には、

綠波春浪滿前陂。極目連雲罷稔肥。

とあるが、罷亞・稔肥は穠穠稻であることいふまでもない。

又た陸龜蒙の詩には、

遙爲曉風吟白菊。近炊香稻識紅蓮。

とあつて、紅蓮稻のことが見えて居る。杜甫の詩には、

荆扉臨野碓。半濕搗香秬。

とあつて、香秬のことが見える。以上は主として黄羣芳譜の稻の部から拾ひあげたものであるが、若し唐宋人の詩集に就いて檢索したら、南宋の品種名を尙ほ幾つか見出すことが出来るであらう。しかしこれだけでも、南宋著名品種の若干が北宋は勿論、唐以來存して居つたことが窺はれるのである。

次にずつと溯つて、晉の郭義恭の廣志の稻に關する記述を檢して見よう。廣志は前にも述べたやうに數種の書に引かれて居るが、後魏の賈思勰の齊民要術には、

廣志云。有虎掌稻紫芒稻赤芒稻白米。南方有蟬鳴稻。七

月熟。有蓋下白稻。正月種。五月穫。穫訖其莖根復生。

九月熟。青芋稻六月熟。梟子稻白漢稻七月熟。此三稻大

而且長。米半寸。出益州。稈有烏稜黑橫青喙白夏之名。

とあり、唐の徐堅の初學記には、

郭義恭廣志曰。有虎掌稻紫芒稻赤穢稻蟬鳴稻。七月熟。

稻有蓋下白。正月種。五月穫。穫其莖根復生。九月復熟。青芋稻六月熟。菓子稻白漢稻七月熟。此三種大且長。三枚長一寸半。

とある。大體は略ぼ同様であるが小異を免れない。齊民要術には「南方有蟬鳴稻」とあるが、初學記には南方の語が省略されて居る。南方は嶺南地方を指すのであらう。さうして蟬鳴稻に就いて特に南方とことわつてあるのを觀れば、この稻は専ら嶺南で作られるけれども、虎掌稻其他はさうでなく、主として揚子江南北の稻作地帯に栽培されたと解すべきであらう。又た齊民要術に引かれたところでは、「七月熟」は専ら蟬鳴稻にかゝるやうに見えるが、初學記では虎掌稻以下の四種にかゝつて居る。當時各種の稻が大抵七月頃に熟したことは、漢以來の稻播種の時期（下文参照）に依つて察せられるから、四種（要術では五種）とも七月に熟したとして差支なからう。蟬鳴稻は最も早く熟するけれども、月で云へばやはり七月で、七月に熟する點では蟬鳴稻も虎掌稻其他も同様であつたのであらう。要するに、廣志の文に依つて、晉代、虎

掌稻・紫芒稻・赤芒（穰）稻・蟬鳴稻・蓋下白・青芋稻・男子稻・白漢稻などいふ品種が存在し、蟬鳴稻以外は揚子江南北の稻作地帯に栽培されたことが窺ひ知られる。尙ほ齊民要術には、

案今世有黃稻。黃陸稻。青稗稻。豫章青稻。尾紫稻。青杖稻。飛青稻。赤甲稻。烏陵稻。大香稻。小香稻。白地稻。孤灰稻。一年再熟。有穠稻。穠稻米一名繡米。俗云亂米非也。有九格穠。雉木穠。大黃穠。常穠。馬身穠。長江穠。惠成穠。黃滿穠。方滿穠。虎皮穠。蒼奈穠。皆米也。

とあつて、當時即ち後魏時代に存在した稷米繡米の品種をかなり多く擧げて居るが、これも廣志に見える諸品種と同じく、揚子江南北一帯に栽培されたものと思はれる。右二種の文獻に依つて晉より南北朝に互つて如何なる品種が存したかを窺ふことが出来る。然るに此等の品種は、南宋地方志の稻品種名の中に殆ど見出されない。さうして嘉泰吳興志物産、⁽²¹⁾ 稻の條には、

廣志曰。有虎芒稻。紫芒稻。又云。粳有烏粳黑橫之類。今並無之。

と云ひ、稷の條には、

齊民要術。水稻篇。有稭稻。一名糯米。音奴亂切。有九格稭雉目稭大黃稭之類。十餘名。今無之。

と云ひ、廣志に見えた稷及び齊民要術に見えた糯が當時吳興即ち湖州に存在しなかつたことを述べて居る。これは湖州一州のことではあるが、湖州は宋代に於ける代表的米産地の一つであつて、此の地に存しないといふことは、浙西一帯即ち當時の主要米産地に存しなかつたことになるであらう。顧ふに廣志及び要術に見える稻品種の多數は南宋時代には既に存しなかつたのであらう。齊民要術に引かれた廣志に見える白米は後の閃西風のやうな粒の白い稻に關係があるやうに思はれ、紫芒稻の名は、南宋の地方志には見えないけれども、玉鏡や姑蘇志に見え、齊民要術に見える大香稻小香稻は宋明の香稻香稭等と類似のものと思はれるから廣志や要術に掲げられた品種も若干残り傳はつたであらうが、その大部分は南宋

支那に於ける稻作等にその品種の發達に就いて

加藤

時代には變化し、原種としては絶滅したと見てよからう。さうして紫芒稻も、その成熟期が、廣志に記されたところと後代のそれと吻合しない。廣志に依れば此の稻は七月に熟するやうである。然るに玉鏡並に姑蘇志に依れば五月種えて九月熟す⁽²¹⁾とあり、南宋時代にも同様であつたことと思はれる。これに關聯して注意せられるのは、廣志に見える稻の成熟期が總じて早いことである。即ち、蓋下白は一歳に再熟するものであるから姑く除外して、虎芒稻・赤橫稻・蟬・累子稻・白漢稻はいづれも七月に熟し、青芋稻は六月に熟するのである。それはかりではなく、齊民要術に引かれた後漢の農書「汜勝之書」には、

冬至後一百十日。可種稻。

とある。冬至後一百十日は大體陰曆の三月若しくは四月の初であらう。又た同じ書に引かれた後漢の崔寔の「政論」には、
三月可種稭稻。

とある。當時稻の成熟には、五箇月を要したやうであるから、三月稻を種えれば、その成熟するのは七月若しくは八月⁽²³⁾

であつたらう。又た「齊民要術」の水稻の條の本文には、

三月種者爲上時。四月上旬爲中時。中旬爲下時。

とあるが、右「汜勝之書」及び「政論」にいふところと大體同様と見てよからう。汜勝之書・政論には、右のやうな種を之を行ふべき地方に就いては説明して居ない。齊民要術にも格段の説明は無いが、初に「三月種者爲上時云云」といふ播種栽培の方法を述べた後、

北方高原。本無陂澤。隨逐隈曲而田者也。二月氷解地乾。燒而耕之。仍卽下水十日。塊既散液。持木斫平之。

納種如前法。云云。

と云ひ、北土高原地方に於ける種法を別に説明して居る。この北土が黃河沿岸地方であることはいふまでもない。されば前に先づ説明された播種の方法は當時稻の主産地であるところの江淮地方に於いて行はるべきものであつたことは殆ど明瞭である。廣志にも南方即ち嶺南のことは特に南方と斷はつて叙述して居ること、前に述べた如くである。廣志と要術とやゝ時代は違ふけれども、この頃稻の栽培法を述べるには、

一般の方法として淮水揚子江一帶のそれを擧げ、北及び南方の方法は特にそれとことわるのが通例であつたのであらう。

後漢時代にも恐らくさやうで、汜勝之書、政論にいふところは、やはり主として江淮地方に行はれる方法であつたのであらう。そして汜勝之書以下齊民要術に至る諸農書に見えるところの播種の時期は、早種の種を方として説かれず、一般の稻の種を方として説明せられて居る。これに依つて、漢代より南北朝時代に互つて、江淮地方に於いて、稻は陰曆の三月若しくは四月の半ば以前に播種せられ、さうして七八月頃成熟したことが知られるのである。

然るに南宋より明代に互つては、稻に早中晩の三大別があつて、早稻は六月、中稻は七八月、晩稻は九十月に成熟し、中稻晩稻特に晩稻に屬する品種が多かつたことは前に述べた如くである。さうして南宋時代の晩稻のあるものは唐代より既に存したのである。されば早中晩三種別の成立並にこれに屬する多數品種の出現は大體唐から宋に互つて行はれたことと見てよからう。要するに漢代より——恐らくそれ以前より

——南北朝中期にかけては、稻の播種の時期も成熟の時期も一般に早く、七月ごろには收穫するを普通としたが、其後變化が起り、唐代を経て南宋末に至る期間に於いて、七八月頃收穫するものゝ外、六月收穫するもの、九十月に收穫するものも出来、かくて或は早稻、或は中稻、或は晚稻に屬するところの多くの品種が成立し、明代の主要なる品種の大部分は南宋に於いて既に成立しつゝあつたのである。稻の品種は唐宋時代に著しき發達を遂げたと言はなければならぬ。さうしてその結果としてうまい米が出来、同時にその産額の増大したことは疑を納れない。

詩經の豳風七月の篇に「十月穫稻」とある。十月は夏正と解せられ、夏正は太陰太陽曆の一種である。されば周代、豳の地方即ち今の陝西省の渭水上流地方では、陰曆の十月に稻を收穫したので、或はこれに依つて、本文に述べた稻收穫の時期に對して疑を懐く人があるかも知れない。しかしこれは豳地方に現れた特殊の事象であらう。後世の書ではあるが、天工開物卷上、稻の條に「(上

略)最遲者歷夏及冬二百日方收穫。(中略)凡稻旬日失水即愁旱乾。夏種冬收之穀。必山間源水不絕之畝。其穀種亦耐久。其土脈亦寒不催苗也。」とあつて、夏より冬に互り二百日にして成熟する稻があり、それが山間源水絶えざる處に適することが述べられて居るが、七月の詩に見えるのも此の類の稻であつたかも知れない。果してさうかどうか十分詳でないが、しかし「十月穫稻」が一地方特殊の現象で、これあるが爲めに、江淮地方の稻成熟が一般に七八月であつたことを疑ふに及ばないことは許されるであらう。

以上に依つて、晉以來明に至るまでの稻品種の發達に就いて、あらまし述べ得たと考へる。清代に至つては、更に多くの品種が分れたやうであつて、高郵新志には早稻九種、中稻三十三種、晚稻三十六種を擧げて居る。それ等の中には宋代明代に存しなかつたものも勿論多くあるけれども、宋明の品種もかなり含まれて居る。宋明の優良品種は清代に於いても大體保存されて居たやうである。

右の外、尙ほ重要な一事實がある。それは宋代に於ける占

(25)

城稻の試作及びその成效である。占城は Champa で、今の佛印中部に當る。宋の眞宗の大中祥符五年(西曆一〇一二年)占城の稻の種子三萬斛を買入れて兩浙・江南・淮南の三路、即ち今の江蘇・安徽の淮河以南、浙江省、及び江西省の地に分給して試作せしめた。これはこの地方に屢旱があつて、動もすれば稻の不作を來したので、占城の稻が早に耐へるよしを聞き、これを輸入栽培せしめ、その害を免れしめんと圖つたのである。この企ては成效し、南宋時代に於いては此等地方の外今の湖南省並に福建兩廣にも栽培せられ、引續いて明清に及んだ。占城稻は早稻の一種であつて、粒が稍小さくして色白く、飯とすれば稍硬く、さうして水旱特に早に耐へるを特色とし、最も早きは六十日にして實り、或は八十日或は百日にして實るものもあつたといふ。即ち水旱に耐へる外、粒の大きさ・色・柔さなどに於いてこれまでの早稻に勝つて居たやうである。されば從來支那に早稻が存在したに拘はらず、占城稻が喜ばれ、淮河揚子江以南に廣く栽培されるに至

つたのである。

占城稻は宋代に於いては一毛作として栽培される場合が多かつたやうである。然るに、その後、その刈跡に、若しくは刈上前、苗莖の間に、中稻晚稻を植ゑることが起り、明代に至つては揚子江沿岸以南に於いてかなり廣く稻の二毛作が行はれるやうになつた。即ち稻の二毛作は、主として占城傳來の早稻と支那で發達した中稻晚稻とが組合されて成立したのである。かゝる栽培方法は清代にもひき續いて行はれた。但し江蘇南部では、清末、小作人が己の所得となるところの麥作の便を圖る爲め、占城稻の栽培を怠り、その結果、稻は中稻若しくは晚稻の一毛作だけとなつたといふことである。

本論の趣旨をごく簡単に要約すれば下の如くである。支那の稻は初は専ら早稻であつて、春早く蒔かれ、秋早く收穫せられたが、ついで中稻晚稻に屬する多くの品種が作られ、味のよい米が多量に生産されることとなり、ついで占城の早稻が輸入栽培され、これと從來の中稻晚稻と組合せて稻の二毛作が行はれるやうになり、その産額は更に増加した。さうし

て中晚稻の諸品種が成立したのは唐宋の時代であつて、占城稻の輸入せられたのは宋代であり、稻の二毛作が行はれたのは明代であつたやうである。唐代、劃期的に米の産額が増加したことは、前に述べた如くであるが、それは、耕地の増大の外、品種改良に因ることが少くなかつたらうと思はれる。

註

- (1) 唐以後、南支那が米の主産地になつたことは、桑原隲藏博士「歷史上より觀たる南北支那」(白鳥博士還曆記念東洋史論叢)に既に指摘せられて居る。
- (2) 「蘇常熟天下足」の諺は、宋の陸游の渭南文集卷二〇、常州舜牛閘記に見え、「蘇湖熟天下足」は范成大の吳郡志卷五〇に見え、前記桑原博士の論文に引用されて居る。
- (3) 「湖廣熟天下足」は明人の著「地圖綜要」内卷湖廣の部に見えて居る。「地圖綜要」の撰者は詳でないが、明末に出來たものであることは其の内容よりして推定せられる。

- (4) 說文第七篇禾部。
- (5) 江南で稷を穂と云つたといふことは今の方言には見えない。しかし宋の丁度「集韻」卷三穂の條、並に司馬光の「類篇」卷七

中穂の條に、均しく「方言江南呼稷爲穂」とあるから、此の書の本本にかういふ記事の存したことを信じて妨げあるまい。尙ほ魏の張揖の廣雅卷一にも「稷、稷也」とある。

- (6) 「爾雅翼」卷一、稻。
- (7) 「嘉靖徽州志」卷八、物産の部參照。
- (8) 「萬曆襄陽志」卷一四物産、「崇禎興寧志」卷一方産、「嘉靖韶州志」卷二土産、「嘉靖惠州志」卷五食貨志等參照。
- (9) 「光緒湖南通志」卷六〇、食貨志四、物産一參照。
- (10) 「寶祐重修琴川志」卷九、叙産。琴川は常熟縣の別名。
- (11) 「淳祐玉峰志」卷下、土産。玉峰は崑山縣の別名。
- (12) 「淳熙三山志」卷四一、土俗類三、物産。三山は福州の別名。
- (13) 「紹定海鹽澉水志」卷六、物産附。
- (14) 「理生玉鏡」に「其不耐風水。四月而種。八月而熟。謂之小娘糯。譬閩女然也。」とある。これに依つて小娘糯と閩女糯と同一であることが察せられる。
- (15) 王鏊「姑蘇志」卷一四、土産。
- (16) 「吳郡圖經續記」卷上、物産。
- (17) 廣群芳譜卷八、穀譜、稻。

(18) 齊民要術卷二、水稻第一一。齊民要術には様々の版があるが、私の用ひたのは四部叢刊本（上元鄧氏明鈔本影印本）である。

(19) 初學記（古香齊袖珍本）卷二七、草部、五穀第一〇。廣志の稻の記事は、齊民要術・初學記のほか、太平御覽卷八三九百穀部三、稻の條にも引かれて居るが、齊民要術に引くところと大同小異である。ついでに云ふ、廣志の稻の記事の末に、益州の米の長さを述べたところには、各本とも誤があるやうであるが、如何に正すべきかは詳でない。

(20) 齊民要術卷二、水稻第一一。

(21) 嘉慶臬輿志卷二〇、物産。

(22) 齊民要術卷二、水稻第一一。

(23) 漢魏六朝の頃にも、稻の成熟に約五箇月を要したことは、齊民要術卷一水稻の部に「雜陰陽書曰。稻（中略）八十日秀。秀後七十日成。」とあるに依つて窺はれる。雜陰陽書の作られた時代は詳でないが、魏晉前後と見て大過無いであらう。

(24) 李彦章「江南催耕課稻篇」の江南早稻之種の章に引くところ。

(25) 占城稻に關する記述は拙稿「支那に於ける占城稻栽培の發達に就いて」（史學第一八卷一・三合併號）に據る。

〔附記〕

右は加藤博士の遺稿の一つで、博士の論文集「支那經濟史考證」第二編に収録せられる豫定のものである。未刊の遺稿にはこの他、支那に於ける銀行業の發達

滿洲に於ける大豆豆餅の生産について

臨安戸口追論

交子の界限について

支那貨幣を錢と稱することについて

刀布の研究

考證失敗談

支那經濟史の研究について

支那古金銀圖錄

等を始め、宋代貨幣史・漢代史等の講義案があるが、それらは逐次適當な形に於いて發表せられるであらう。昭和二十年五月十四日附博士の某氏宛書簡に、右の論文集に就いて、

敢へて傳世の文字と自負するだけの自信は無之候へども、半生の心血凝つて此の中に在り、君國に盡さんとする一片歌々の念亦之を外にして託するの所無之候

と記されてゐる。我等は當今の困難なる印刷狀況を克服して、その刊行の一日も早からんことを切望する次第である。